第３節　『プチ哲学』の表現指導

１　佐藤雅彦の作品について

本研究では漫画、アニメーション、映像、音楽、テレビゲームなどの「サブカルチャー」と称されるメディアに目を向け、国語科の教材として成立するぎりぎりの「境界線上」に位置付けることを、提案してきた。それらの「境界線上の教材」は、多くの学習者が共通して関心を寄せる分野の素材にほかならない。そのような素材に対して、教師の側から積極的なアプローチを図ることにしたらどうだろうか。学習者と共通の興味を抱くことができれば、その素材は教材へと一歩近づくことになる。

素材が教材となるためには、当然のことながらそれを用いた国語科の授業が成立しなければならない。すなわち、その素材を使用した国語科の学習活動が成り立つことが必要条件となる。いくら魅力的な素材を発掘しても、その扱い方が見えない限りは教材にはなり得ない。素材を発掘したら、直ちにその教材化を試みたいものである。教材化を経て初めて、素材は教材として生まれ変わることになる。

本節では新しいタイプの国語科教材として、佐藤雅彦の『プチ哲学』（マガジンハウス、２００６．６）を提案する。佐藤は１９５４年生まれのクリエーターで、電通を経て独立、そして２００７年現在は東京藝術大学大学院映像研究科教授、慶応義塾大学環境情報学部客員教授として活躍している。優れたＣＭプランナーとしての仕事はよく知られるところとなり、加えてゲームソフト「ＩＱ」のプロデュースや「だんご３兄弟」の作詞など、幅広くクリエーターとして活躍している。ＳＦＣの「佐藤雅彦研究室」の活躍は、ＮＨＫの「ピタゴラスイッチ」その他で有名である。

佐藤の『プチ哲学』は、『オリーブ』という雑誌の３７７号から４０７号まで掲載された「プチ哲学」を中心にまとめられたものである。全体で３１のテーマが、本の見開き２ページにまとめられている。すべてのテーマに著者佐藤雅彦の漫画（イラスト）と文章が収録されているが、いずれのテーマにもクリエーターとしての着想がよく表れている。わたくしが注目したのは、一つのテーマをめぐっての漫画と文章の関連という要素であり、国語科の教材として機能すると判断した。以下に同書の中から二つのテーマを選択して、実際の授業の構想について紹介することにしたい。本節で紹介する授業は、中学校・高等学校のいずれの学年においても導入できる柔軟な内容になっている。授業の配当時間に関しては、１時間もしくは２時間という短時間内で扱うことができる。なお、以下の引用は、図版も含めてすべて『プチ哲学』からである。

２　「二匹の小魚」の教材化―『プチ哲学』の表現指導（１）

まず初めに「二匹の小魚」を取り上げてみたい。このテーマに寄せられた漫画は《図３－３－１》に引用した二種類である。左右ともまったく同じように二匹の小魚が描かれているが、左の漫画ではその周囲に水槽らしきものが書き加えられている。それぞれの漫画の下には、次のような文章が添えてある。まず、右側の漫画に添えられた文章を引用する。

《図３－３－１・二匹の小魚》

南の海の底に／小さな魚の恋人たちが／おりました。
二匹はお互い／深く愛し合っていました。
―こんな広い海の中、／君に出会えて／なんて僕は幸せなんだ
―私もなんて／幸せなんでしょう

続いて左側の漫画には、次のような文章が添えられている。

ところがある日のこと／二匹は運悪く／捕らえられてしまいました。
そして狭い狭い水槽に／入れられてしまいました。
－大好きな君と／いつも一緒にいられて
なんて僕は／幸せなんだ
－私もなんて／幸せなんでしょう
深く愛し合っている二匹の／小さな魚たちがおりました。

『プチ哲学』には、すべてこのような漫画が描かれ、その漫画に一つのテーマが与えられ、さらにそのテーマに関する著者のコメントが紹介されるという構成になっている。この「二匹の小魚」のテーマは「『不変』ということ」である。すなわち、世の中には環境が変わると価値が変わるものが多いわけだが、ここで紹介された「二匹の小魚」のように環境が全く変化しても変わらない価値を有するものもある。「自分の中に不変なものを持つのもかっこいいことであります」と、著者は述べている。

授業では、まずこの二種類の漫画を紹介する。どのようなメッセージが喚起されるか、という問題をめぐって、自由に意見交換をさせる。漫画を見ただけでは、著者のメッセージを把握することはできない。学習者の中には、二匹の小魚が水槽に捕らえられることによって、自由が束縛されるという解釈をする者もある。学習活動としては、この段階からすでに「授業レポート」に表現させるようにする。二種類の漫画からどのようなことを連想するのかを、自由に表現させるのである。「授業レポート」には必ず「個人レベル」と「クラスレベル」の二つの欄を設けておいて、自分で考えたことは「個人レベル」の欄に、クラスメートが発表したことは「クラスレベル」の欄にそれぞれ分けて記入させることにしておく。

発表が一段落してから、続いて著者による文章を紹介する。紹介の方法としては、まず漫画の図版をコピーしたプリントを配布し、続いて文章を載せたプリントを配布するというように、授業の進行に応じて段階的に配布するようにしたい。そして先に引用した文章であるが、あえて左側の漫画に添えられた文章にブランクを設けておく。具体的には「－

大好きな君と／いつも一緒にいられて」の箇所をブランクとする。このブランクに相当することばを、前後の文脈から想像させるのである。これもまた一つの課題として、「授業レポート」の「個人レベル」の欄に考えたことを記入させ、意見交換をする。ブランクとしたのは、小魚のオスのことばの一部だが、捕らえられて狭い水槽に入れられても「なんて僕は／幸せなんだ」と思える理由を想像しなければならない。

このブランクは、次の課題へと橋渡しをするための課題である。すなわち、ブランクに入ることばを考えることからさらに発展して、この二つの漫画が発信するメッセージを考えさせることにする。さまざまな話し合いを経てから、「不変」という著者自身のメッセージへとたどり着くようにする。『プチ哲学』において著者は、一つのテーマを掲げ、そのテーマに関わる漫画に添えて、短い文章を書いている。「二匹の小魚」のテーマは「『不変』ということ」であり、著者は次のように説明している。

> この小魚たちのように、自分の中に不変なものを持つのもかっこいいことであります。

すなわち、周囲の環境が変わっても、愛し合う小魚たちの関係は変わらないというエピソードが紹介されているわけである。授業は最後に、身近な場所から「『不変』ということ」というテーマに相当する事例を探すという活動へと行き着く。著者が具体例を通して紹介したメッセージを受け止めたうえで、さらに身近な具体例を探索するという課題である。なお、これらの課題はすべて文章で表現させることから、「書くこと」の活動を常に伴うことになる。さらに、書いたことを相互に発表する活動を組み込むことによって、「話すこと」の活動につなげることもできる。『プチ哲学』を教材として使用した表現指導が実現するわけである。

３　「中身当てクイズ」の教材化－『プチ哲学』の表現指導（２）

『プチ哲学』から、次に「中身当てクイズ」というタイトルのトピックス[1]を選ぶ。そこには《図３－３－２》のような漫画が、１０コマにわたって描かれている。内容にクイズの要素が含まれることから、多くの学習者の関心を引き付けることができる素材である。授業は次のように展開することになる。

まずはこの漫画をそのままプリントして配布する。そして、この漫画から読み取ることができる論理を箇条書きに整理させる。その内容は、次のようなものになる。

① それぞれのカップには、コーヒーかミルクのどちらかが入っている。
② 三つのカップが、すべて同じ中身ということはない。
③ それぞれのカップは、自身の中身を知ることはできない。
④ まん中のカップと上の段のカップは、下に置かれたカップの中身を知ることができる。
⑤ 下の段のカップには、コーヒーが入っている。
⑥ まん中の段のカップには、ミルクが入っている。

このように漫画の中で提示されている事柄を整理することによって、情報を的確に理解するという能力が培われる。それを前提として、漫画の最後に掲げられた「クイズ」に挑

《図３－３－２・中身当てクイズ》

戦させることになる。すなわち、ポットが「実は、君たちの中で一人だけ自分の中身がわかる人がいます」と語りかける。それから間もなく手を挙げたカップは、三つのうちどのカップだったのか、ということを問うクイズである。そこで次に、学習者にこのクイズの正解を、理由を添えて論理的に表現させることにする。まとめた文章はグループやクラスの中で自由に発表させ、相互に意見交換を実施する。こうして問題意識が深化したところで、作者の掲げたテーマと文章を紹介したい。

この回のテーマは「情報がない、という情報」である。そして漫画に添えた文章において、著者の佐藤雅彦は「正解はまん中のカップなのです」という結論を明らかにしたうえで、その理由について分かりやすく説明している。自分自身の解釈と比較して、著者の文章を読み、論理の立て方について検証するという内容まで展開することになる。

学習者の多くはクイズが好きなので、興味を持ってこの課題に取り組む。最後に、今度はこの漫画のテーマについて、考えたことをまとめさせ、合わせて身近な日常の中から、「情報がないという情報」に相当する具体例を集めさせる。

わたくしは２００１年度の中等部１年の授業でこの「中身当てクイズ」を用いた表現指導を展開し、最後に発展課題として身近な具体例を考えさせた。中学１年生は多様な事例を探してくる。学習者が考えた具体例を一つ、以下に紹介したい。台風の接近に伴って、

臨時ニュースが随時流れて台風情報を伝える。ところがその地域に大した影響がない場合には、臨時ニュースとはならない。すなわち、テレビのどのチャンネルに合わせても、台風情報が流れていないような場合、すなわち「台風の情報がない」ということは、「台風の影響が少ない」という情報を意味するものである。その他、彼らは様々な具体例を考えて、積極的に発言をした。「中身当てクイズ」は、表現指導の教材として有効に機能したことになる。

単にクイズを解くという活動ではなく、まずはいかに論理的に自らの考え方を表現するかという点、さらに著者の指摘に即して身近な場所を見詰めるという点が、授業の要点となる。個人の見解は、グループおよびクラスの中で相互に情報交換をして検証する。このようなプロセスを経て、学習者の想像力に磨きがかかる。さらに自らの考え方を表現することによって体系化することができる。

４　総括と課題

今回本節で紹介した実践は、いずれも１時間もしくは２時間の配当時間で十分に扱うことができる。しかも、表現の指導を中枢として、短時間内で「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の活動がすべて含まれた国語の授業を展開することが可能である。加えて、グループ学習という形態を適宜導入して展開することができる。学習の方向性が極めて多様で、様々な応用をすることができることが大きな特色となる。最後に総括として、今回紹介した『プチ哲学』の教材化に基づく実践の特色を改めて整理しておきたい。

まず初めに掲げるべき特色は、表現課題の中に「謎解き」の面白さを含めたという点である。学習者の興味・関心を喚起するための方策として、課題の中に「謎」と称することができるような要素を含ませておく。テレビゲームに親しんだ世代の学習者は、「謎解き」の要素に強い関心を寄せる。特に「中身当てクイズ」の場合、まさに「クイズ」と称することができる要素が含まれているために、彼らは興味を持って課題に取り組む。そして謎が解けた瞬間に、素材に対する興味・関心が喚起される。これは、著者の佐藤自身が「ああ、そういうことだったのねの供給」[2]と称する瞬間に繋がる。

次に掲げるべき特色は、漫画（絵・イラスト）から読み取れる情報を整理するという要素である。文章を読むという活動よりも、図版を含む映像を読むという機会の方が多い学習者にとって、漫画を読んでそこから的確な情報を引き出すことは極めて関心の高い活動となる。新しい国語科の学力開発のためにも、このような実践を今後積み重ねる必要があるだろう。

第三の特色として、表現した内容を必ず発表させて、学習者相互で情報交換する場を設定するということがある。他者の表現に接することは、より新たな可能性を開くものであり、表現意欲の喚起につながる要素でもある。表現指導の場所には、可能な限り学習者相互の情報交換が必要となる。教室には多様な学習者の集団が生成し、そこには独自の文化が立ち現れる。わたくしはそれを「教室の文化」と称しているが、表現指導の充実のためには、この「教室の文化」の活用が必要不可欠なものになるであろう。

いま一つ、ここで紹介した実践には、それぞれ「発展課題」を付してある。『プチ哲学』の中だけではなく、学習者自身の身近な日常を見詰めて、その中から『プチ哲学』につな

がる事象を探すことが課題の趣旨である。『プチ哲学』の連載を始めたときの思いについて、著者の佐藤雅彦は同書に収録された中川いさみとの「プチ対談」において、次のように述べている。

「プチ哲学」は、ちょっとだけ深くいろいろなことを考えてみると毎日が楽しくなるということをわかってもらいたくて始めた連載です。人生のことを深ーく考えてどうのこうのではなくて、たとえば、社会の仕組みとか物事が動く法則とかが少しだけ見えてくれば楽しいという、そういう提案をしてるつもりでやってきました。

著者のこの発言からも、日常生活の中から関連する話題を探すという活動は、本の趣旨から外れることはない。発展課題によって、『プチ哲学』は教材としての真価を発揮することができる。

本節で検証したように、『プチ哲学』は国語教育、特に表現指導のための新しい教材として実践に生かすことができる。新しい教材を発掘するためには、日ごろから視野を広く、かつアンテナを高くして、様々な素材への目配りをしなければならない。多様な素材の中から錬金術のように価値ある教材を生み出す努力が、いま教師には求められている。

注

1　「中身当てクイズ」に関しては、中学校と高等学校の教科書にも収録されている。このうち高等学校では、２００４年度から使用された『高等学校現代文』『新編現代文』（いずれも三省堂）に収録されている。そこには「まずこの漫画を読んで、提示された状況を正確に把握してみよう。」という課題が設定されている。漫画を読むという活動が国語科の課題として設定されているところに注目したい。

2　佐藤雅彦は「ああ、そういうことだったのねの供給」（『キノの本』マドラ出版、１９９９．３）において、次のように述べている。「僕にとってうれしいことの一つに、人が『ああ、そうだったのか！』と物事を理解する瞬間に立ち会う、ということがあります。（中略）なぜなら、それこそが人間が人間らしい喜びをもっとも感じる瞬間だと思っているからです。『わかる』という感覚を与えること、これを僕は『ああ、そういうことだったのねの供給』と呼んでいます。」